

「剣の道」

全日本女子剣道選手

諸岡温子選手(経済3)が 中大現役女子初の快挙

全日本女子剣道選手権大会(3月14日、長野市)の決勝戦。

剣道部の諸岡温子選手(経済3)は、挑戦者の気持ちを胸に秘めて挑んだ。

勝利を決めたメンは体が自然に反応して繰り出された。

幼少期からのあこがれの舞台に、初出場で初優勝。

中大の現役女子としても初めて日本一の座をつかんだ。

学生による全日本女子制覇も18年ぶりという快挙だった。

学生記者 西沢美咲(総合政策2)

究めら

権を制覇



全日本女子剣道選手権で「攻めの姿勢」を貫いた諸岡温子選手（写真提供＝「中大スポーツ」新聞部）



全日本女子剣道選手権には東京都予選を勝ち抜いて出場、大会後は小池百合子都知事に優勝報告を行った

日本一の実感わかなかった

「勝った瞬間も正直、実感がわかなかったんですが、『優勝したんだ』と何とも言えない気持ちになって…。いつかは日本一にはと思っていましたが、全く想像もしていなかった。心が動揺していました」

もちろん、うれしい“動揺”だったはずだ。高校時代を含めて、初の個人での大きなタイトル獲得となった。「一戦一戦を集中して戦う」。大舞台にこの心構えで臨み、日々の努力を实らせた。

決勝戦は高校時代の先輩、山崎里奈選手(明治大)との手の内を知る者同士の顔合わせ。延長で相手がコテを打ち込んできた瞬間、反射的に繰り出したメンが鮮やかに決まった。「思い切って挑戦者として向かっていく。最後のメンは自然に体が反応しました」。勝敗を分けたポイントを「よく分からない」と振り返るほど、意識は試合に集中していた。

どん底からの“逆襲”

北原修監督は「初戦を突破すれば上位に行ける。一番のカギは3回戦」と考えていた。3回戦で相まみえた村田桃子選手(鹿屋体育大=当時)も高校の先輩だ。実力は五分五分とみられたが、山場のこの対戦も「胸を借りつもりで思い切った」。見事な飛び込みメンで会心の勝利、波に乗った。

実は全日本女子選手権の1週間前、諸岡温子選手は部内戦で4敗を喫した。「そこから開き直ったのか、大会の4日前には剣道がよくなっていった」と北原監督。いわば、どん底の状態から日本一に上りつめた格好だ。

ライバルの剣士を尋ねると、高校時代の同期、妹尾舞香選手(鹿屋体育大)の名前を挙げた。高校時代にインターハイ連覇、世界選手権個人3位の実績を持つ妹尾選手の背中を常に追いかけてきた。「学生のうちに対戦して追いつきたい」と謙虚に話す。もちろん、諸岡選手も3年に一度開催される世界選手権での日本代表の座を狙っている。

剣道の真髄「人間形成の道」

仲のよかった兄の昭徳さん(商4)が剣道を始め、兄を追いかけるように小学2年のとき初めて竹刀を手にした。剣道の魅力は「やればやるほど熟練度が上がる」ところだ。剣の道は人間形成に通じる。勝ち負けと同じくらい、礼儀作法や日頃の生活態度を重んじる。これは中大剣道部の伝統でもある。

「大会を通じて挑戦し続けることの大切さを改めて知りました。中大剣道部は仲が良く、日本一を目指すのに理想的な環境です。稽古も稽古以外も毎日が楽しい」

将来は警察官の道に進み、剣道を続けていくという。



諸岡温子選手

もろおか・あつこ。福岡・中村学園女子高校卒、経済学部3年。身長166センチ。高校時代は団体で2年連続3冠（全国選抜、玉竜旗、インターハイ）を達成。一足一刀（一足を踏み込めば竹刀が相手の打突部位に届く距離）よりも相手から離れた「遠間（とおま）」の間合いからの技、打ち合いが得意。パワーの源は「白いご飯」。授業と部活の両立にも気を配っている。音楽が好きで、ロックバンド「RADWIMPS」のファン。1学年上の兄、昭徳選手（商4）も中大剣道部に在籍している。

謙虚、素直に剣道に向き合う 男子選手並みのスピード支える脚力

北原修監督の目

諸岡温子選手の優れた点は男子選手並みのスピードにあると、北原修監督はみている。対一の戦いの剣道では、相手との間合いを制することが勝敗を分ける重要なカギとなる。諸岡選手は、間合いから相手に体を寄せるスピード、竹刀を振るスピードともに一級の実力の持ち主だ。

「左足のばねの強さは持って生まれた天性のもの。脚力がスピードを支えている」。自身も団体インカレ制覇の実績を持つ北原監督はそう目を細めた。積極的で前向きに剣道に取り組み、謙虚さやアドバイスを受け入れる素直さ、研究熱心なところも良いと褒める。

諸岡選手はもともと、選手同士の体が接近し、面と面がぶつかり合う、つばぜり合いから身を離れた瞬間に繰り出す引き技が得意だったが、全日本剣道連盟はコロナ収束までの暫定的なガイドラインとして、つばぜり合いを避けると取り決めた。

諸岡選手は「得意な引き技を打てないことは辛かった」と話すが、高い身体能力により、引き技ではなく、仕掛け技だけで十分に戦えると、北原監督は分析している。本来の天賦の才脳が、ガイドラインによって攻撃型の戦い方として図らずも生かされる形になった。

「今の日本一を勝ち取った攻めの剣道を継続してほしい。防御力を強化しようとする、持ち味の攻撃面でのスピードが甘くなりかねない。(諸岡選手には)周りの仲間と一緒に強くなりたいという意識やリーダーシップもある」と北原監督。将来は日本の剣道界を背負う存在となり、誰からも応援される剣士に育ってほしいと願っている。





諸岡温子選手 日本一への軌跡

第59回全日本女子剣道選手権大会 (3月14日、長野市ホワイトリング)

〈決勝〉

○諸岡温子 (東京・中央大) (メ 延長) 山崎里奈 (宮崎・明治大)

〈準決勝〉

○諸岡温子 (メメ 延長 メ) 竹中美帆 (栃木・団体職員)

〈準々決勝〉

○諸岡温子 (メ 一本勝ち) 小川梨々香 (新潟・日体大)

〈3回戦〉

○諸岡温子 (メ 一本勝ち) 村田桃子 (鹿児島・鹿屋体育大出)

〈2回戦〉

○諸岡温子 (メメ) 乗田美紀 (三重・教員)

〈1回戦〉

○諸岡温子 (メ 一本勝ち) 飯島咲季 (長野・教員)

剣道への真摯な取り組み、 仲間と切磋琢磨する姿、礼儀が大きな刺激に 胸を張り「頑張った」と言えることを見つけない

響き渡る声と、朝稽古に真剣に励む剣士たちの迫力ある姿。多摩キャンパス第1体育館の剣道場に足を踏み入れたとき、剣道部の皆さんの迫力、熱気にまず圧倒されました。

剣道場から気合の入った声が聞こえ、人いきれや運動部ならではのにおいが、私に中学・高校のバレーボール部で練習をしていた頃のことを思い出させました。朝稽古を終え、次々に挨拶の声をかけてくれる部員の皆さんからは、礼儀を大切にしていることが分かります。



明るく気さくな人柄

「HAKUMON Chuo」の表紙写真の撮影で、竹刀を構える諸岡温子選手は、凛とした表情で、とても格好よく感じました。選手としてのたくましさの一方で、取材すると、明るく気さくな人柄で、剣道が心の底から好きだという気持ちが伝わってきました。部活動をしている学生は休みがなく、忙しいという印象がありましたが、休みの日にも練習をしたり、学業と両立しながらプラスアルファの練習をしたりと、上手に時間を使っているようです。

剣道の戦い方の研究や分析にも熱心で、明るく前向きなところや、アドバイスなどを素直に受け入れるという点は、北原修監督も素晴らしいと認めています。また、真剣に、そして積極的に剣道に取り組む姿は、他の部員にも好影響を与えていると感じました。

諸岡選手は、自分だけでなく周りの選手たちと一緒に



諸岡温子選手と学生記者の西沢美咲さん

に強くなりたいという意識を持ち、仲間と力を合わせてのインカレ制覇が目標の一つです。剣道部の部員同士が非常に仲が良く、心を許し、稽古後に笑顔で楽しそうに話す姿も印象に残っています。

「挑戦し続ける」姿勢

日本一という初のビッグタイトルを獲得した諸岡選手。しかし、決してこの結果だけに満足せず、挑戦し続ける姿勢を忘れないという熱意を感じ、信頼できる仲間とともに努力する姿は輝いて見えました。これからも剣道界を背負っていく選手として、活躍に期待したいと思います。

剣道に真剣に取り組み、礼儀や人間性を身に付け、目標に向かって頑張る姿は、私に刺激を与えてくれました。4年間という長いようで短い学生生活ですが、私も胸を張って「頑張った」と言えるようなことを見つけたいと思いました。真剣に取り組んだ経験は必ず自分の人生の糧になってくれると思います。

学生記者という立場から、同じ中大生の活躍を間近で見て、知ることで、私自身の残り2年半の大学生活をどう有意義に過ごすべきかも考えさせられました。学業はもちろん、一生の仲間を見つけて思い出を増やし、学生のうちにしかできないことに取り組んで、多くのことを吸収していきたい。一日一日を無駄にせず、残りの学生生活を送りたいと思います。

(学生記者 西沢美咲)

【中央大学剣道部】

1893(明治26)年創部。清家羅偉主将(法4)、時田利瑚副将(女子主将=経済4)。部員数は男子48人、女子16人。北原修監督は「大学生は厳しい指導だけで強くはならない。何かあれば相談できるよう、フレンドリーに常にコミュニケーションを図っている」と指導方針を語る。インカレ制覇を見据え、「周りから応援される剣道部」を目指して活動している。